

Vijñānabhikṣu の相互投影説

佐 藤 裕 之

中世インドの哲学思潮である統合主義によってその名を知られる VBh. (Vijñānabhikṣu) の思想を個別的に見るならば、その特徴のひとつとして相互投影 (parasparapratibimbana) 説をあげることができる。この問題は、既に、Vācaspatiśra との比較という方法によって研究されてきた¹⁾。しかし、その場合に参照されたテキストは、*Saṃkhyasātra* に対する註釈書 *SPBh.* (*Saṃkhyapravacana-bhāṣya*) と *Yogabhāṣya* に対する註釈書 *YV.* (*Yogavarttika*) のみである。そこで、筆者は、VBh. 研究上でのもう一つの主要なテキストである *Brahmasūtra* に対する直接の註釈書 *VABh.* (*Vijñānamṛtabhāṣya*)²⁾ を中心の資料とし、認識生起過程 (jñānotpattiprakriyā) の一段階を説明する理論としての投影説³⁾ に考察を加えることにする。

VBh. は、*VABh.* の中で、Sāṃkhya 学派と Yoga 学派の説を採用すべきである⁴⁾として、次のような認識生起過程を述べる。

「(1)対象と感官の結合 (samyoga) 等によって、衣服の汚れのような統覚機官に存するタマス (baudhatamas) という実体が除去される。(2)その後、あたかも、紅花との結合から、無垢の衣服に紅花の形相であるものが生じるのと全く同様に、対象と〔統覚機官と〕の結合から、無垢でサットヴァが優勢な統覚機官 (buddhisattva) に対象の形相であるものが生じる。この統覚機官の状態が、対象の形相をとる『統覚機官の変容 (vṛtti)』と言われる。……(3)そして、この〔統覚機官の〕変容は、あたかも生じるかのように、精神原理 (cetana) に投影される。……(4)そして、その後、水晶壁が自己に投影され (svapratibimbita) 紅花に染められた衣服を顕し出すように、映像の基体 (adhiṣṭhāna) である精神原理は自己に投影され対象に染められた統覚機官の変容を顕現させる (avabhāsayati)。」⁵⁾

この中、投影説は(3)で統覚機官の変容の成立後、精神原理がそれを顕現させるために、統覚機官から精神原理へ方向として適用されている。VBh. がこの方向によって統覚機官の変容の顕現を説明するのは、彼が、映像に対して空虚 (tuccha)・非実在 (avastu)・虚妄 (mithyā) という性質を与えることに基づく⁶⁾。つまり、この投影方向とは逆の精神原理から統覚機官へ方向によって、統覚機官の変容を顕現させようとする、統覚機官に投影された精神原理は空虚等の性質をもつ映

像であるから、顕現という作用をする能力がなくなるのである⁷⁾。そして、VBh. は、投影によって可能となるこの統覚機官の変容の顕現を

「そして、プルシャにあると言われる対象に染められた統覚機官の顕現こそが、『認識手段 (pramāṇa) の結果 (phala)』『正しい認識 (pramā)』と言われる。」⁸⁾

というように認識結果と呼ぶことから、ここで認識生起過程は終結し、新たな過程はもう必要としない。つまり、VBh. にとって、この認識生起過程に適用される投影説は相互投影説ではなく、統覚機官から精神原理へという一方向で説明していることになるのである。

以上述べたのは、認識対象が特に限定されない一般対象の場合であったが、VBh. は、アートマンの認識生起過程については、以下のように説明する。

「(1)聖典 (śāstra) 等によって、或は、ヨーガによって生じる特質 (yogajadharma) によって、統覚機官内のタマスが凌駕される。(2)その後、無垢の統覚機官に『われはブラフマンなり』等というアートマンの形相をとる変容が生じる。……(3)そして、他ならぬその変容が、恰も生じるかのように、精神原理に投影されて、(4)顕現する。」⁹⁾

周知のように、Vedānta 学派では、アートマンの自己光照 (svaprakāśa) によってその認識を説明する¹⁰⁾が、VBh. はその場合の「対象が同時に主体であるという矛盾 (karmakartṛvirodha)」を指摘し、上記のような認識生起過程を述べるのである。この矛盾は、アートマンは原像 (bimba) として主体であり、自己に存する自己の映像 (svagatasvapratibimba) として対象である、という在り方の区別 (prakārabheda) によって理論上回避される¹¹⁾。この限りにおいてアートマンが認識対象の場合にも、投影の方向としては、統覚機官から精神原理への一方向だけである。

しかしながら、変容と映像について考慮すべき問題が残っている。簡潔に言うならば、元来、映像は、その基体に何ら変化を与えず、一方、変容は、基体に変化をもたらすという点で、両者は、厳密に区別されるものであるが、

「それ (統覚機官への精神原理の投影) は、統覚機官が水瓶等の形相に変容するように、精神性の形相に変容することである。」¹²⁾

等と言われる時、両者の区別は無視されていると言わなければならない¹³⁾。即ち、アートマンの認識生起過程は、アートマンを統覚機官に投影することによって認識対象とし (これが統覚機官の変容である)、さらに、それが認識主体である精神原理によって顕現させられるために精神原理に投影されるのである。従って、この場合には、統覚機官と精神原理の間で、投影がなされることから、「相互投影」である。しかしながら、ここでは、ただ相互に投影するという意味ではなく、投

影されたものがさらに投影されるという意味での「相互投影」である。

以上の考察より、次の二点を結論として指摘する。(1)認識対象が水瓶等の一般対象である場合、その認識生起過程に適用されているのは、統覚機官から精神原理へという一方向だけである。(2)認識対象がアートマンである場合、その認識生起過程に適用されるのは、二方向であるが、この場合は、投影されたものがさらに投影されるので、厳密にいうならば、「二重投影」と呼ぶのが相応しい。そして、この第二の点が、VBh. の認識生起過程における相互投影説の特徴であると思われる。

認識生起過程以外における VBh. の相互投影説、及び、相互投影説の全体的な見通しについては別の機会に論じることとする。

- 1) S. K. Saksena : "The problem of experience in Sāṃkhya-Yoga metaphysics with special reference to Vācaspatimīśra and Vijñānabhikṣu", *The Poona Orientalist*, Vol. 4, No. 4, 1940, pp. 174-182. 等を参照。2) テキストは K. Tripati: *Vijñānabhikṣu's Vijñānāmṛtabhāṣyam on Brahmaśāstra*. [Prācya Vidyā Series 1.] Varanasi, Banaras Hindu University, 1979. を使用する。VABh. の中でも特に I, 1, 3. が中心となる。この箇所は、最も体系的に認識論が説かれている。3) 認識生起過程における投影説では、本来、そうでないにも拘らず、精神原理が認識主体とみなされる。このことは、あくまでも認識生起過程が日常経験の世界での問題であることを示している。本来の認識主体を説明する場合にも、投影説が適用されるが、ここでは触れない。投影説の歴史については羽多野伯猷「数論派のプラティビンバ(反影)説について」『文化』第10巻第9号昭和18年 pp.1-38.参照。4) VABh. I, 1, 3. p.397⁻⁸ 5) *ibid.*, p.399⁻²³ 6) *ibid.*, p.40²² YV. I, 4, p.20²⁰ (ed. by N. Mīśra, Bhāratīya Vidyā Prakāśana, 1971.) SPBh. I, 87, p.44¹⁰ (ed. by R. Garbe, [Harvard Oriental Series, 2.] Cambridge Mass., 1943.) 不二一元論学派のヴィヴェラナ派では、映像を実在と考える。T.M.P. Mahadevan : *The Philosophy of Advaita*, Madras, 1957. p.225. N.Bandyopadhyay : "The Buddhist Theory of Relation between pramā and pramāṇa", *Journal of the Indian Philosophy*, 7, p.66. 参照。7) YV. I, 7, p.33¹⁰⁻¹¹ 8) VABh. I, 1, 3, p.41¹⁶⁻¹⁷ 9) *ibid.*, p.41²⁵⁻²⁷ 10) VBh. の自己光照批判については、*ibid.*, pp.42¹⁵⁻⁴³ ここで VBh. は Citsukha の定義を排斥している。不二一元論学派の自己光照については、G.L. Chaturvedi : *The Concept of Self-Luminosity of Knowledge in Advaita Vedānta*, Lucknow, 1982. 参照。11) *ibid.*, p.42³⁻⁵ 12) *ibid.*, p.40¹⁸⁻¹⁹ SPBh. I, 87. p.44⁹⁻¹² 13) 変容と映像に区別がないとすると、先述した認識対象が限定されない場合にも、統覚機官は対象の映像を宿すと言える。羽田野前掲論文, p.23. 参照。
- <キーワード> Vijñānabhikṣu, *Vijñānāmṛtabhāṣya*, 認識生起過程, 映像, 相互投影

(東京大学大学院)